

1・6 調査研究に対する外部評価

当所の調査研究に対して、外部からの意見を聞きながら県民ニーズなどに合致した効率的で効果的な研究業務の遂行とその透明性の確保を目的に実施。

年月	調査研究課題	総合評価	コメント
19年10月	<i>Vibrio vulnificus</i> に関する研究（調査研究期間：H16～H18）	高く評価できる	<ul style="list-style-type: none"> ・有明海・八代海沿岸で多発するビブリオ・バルニフィカス(以下「V.v」という。)感染症は、慢性肝疾患等により免疫力の低下している人が感染すると、重篤な症状を引き起こし、致死率も高い。この感染症の原因菌であるV.vの生息状況をはじめ薬剤感受性やO血清型などを解明することは意義がある。 ・県内でV.v感染症を発症した患者の菌株(15株)や有明海・八代海沿岸の海水、魚介類等から培養した菌株(344株)について、現在、経験的に患者の治療に使われている20種の薬剤に対する感受性試験を行い、それぞれ治療効果が裏付けされたことは成果である。 ・研究所で保有する菌株についてO血清型別試験を行い、環境株や患者株のO血清型の分布状況が明らかになったことは、V.vの生態を解明して行くうえで意義がある。 ・環境調査の中で、水鳥の糞便中にV.vの存在が明らかになり、初めて水鳥の体内でV.vの越冬の可能性が示されたことは学術的にも高く評価される。 ・国内で報告されたV.v感染症患者の約4割が有明海沿岸で発生しており、本県の進んだ取組みが、今後九州関係県との連携や共同研究等により更に進展してV.vの生態や病原性の解明につながり、患者発生の予防対策及び治療対策へ一層寄与することが期待できる。
19年10月	<i>Vibrio vulnificus</i> の発生動向と環境因子に関する研究（調査研究期間：H20～H21）	非常に高く評価出来る	<ul style="list-style-type: none"> ・ビブリオ・バルニフィカス(以下「V.v」という。)感染症が多発している有明海・八代海沿岸のV.vの生息状況については、海水、海泥及び水鳥等の生態調査が行われてきたが、その発生動向と環境因子の関係はまだ十分解明されていない。 ・同沿岸海域に設けた定点において定期的にV.vの発生活長と降水量、塩分濃度等の環境因子との関係を明らかにし、さらに、県内で販売されるアサリ、カキ等の二枚貝のV.vの生菌数等についても調査する。これらの調査結果を関係機関へ適時的確に情報提供することにより、患者発生の予防対策の構築に資することが可能となり、行政上大いに期待できる。 ・V.vは基本的に弱い菌で培養が難しく、培養法が確立されていない状況のため、適切な増菌培地や培養時間等について研究し培養法を確立しようとすることは、技術開発面で意義がある。 ・V.vに関するこのような研究の取り組みや成果は、マスコミやインターネット等を通じるなどしてもっと一般県民にも積極的に情報提供するのが望ましい。

※成果評価：調査研究の事業終了後に、研究目的の達成状況、行政施策等への寄与度及び県民ニーズへの波及等を評価